

石原 剛 准教授

日時：2012 年 7 月 19 日、場所：早稲田大学

インタビュー担当者：阿部慎平、中村茉由

インタビュー全文

男性学とは

阿部：まず初めに、男性学について教えてください。

石原：男性学はとても新しい学問です。学問としては海外から入ってきました。アメリカがメインです。

中村：それはどの位の時期からですか。

石原：大体 1970 年位からです。実は女性学が根っ子です。女性が抑圧されている状況と男性が抑圧されている状況に多くの重なる部分があるということに男性達が気付いてきたことで生まれました。女性学の分野からすれば、歴史的にどの国においても男性は抑圧者であり、また社会的に恵まれていた部分があったと思います。男性優位というイメージがあります。それは事実であり、男性学の中にも女性学にシンパシーを感じている人達もいます。しかし、同時に男性が抑圧者としてのみ見られることに対して少し待って欲しいという気持ちもあります。男性にとっても生きにくい世界になってきているのです。

例えば訴訟社会であるアメリカにおいて、離婚した時の養育権は大きな問題です。養育権の裁判を行った場合、女性が権利を獲得することが大変多かったのです。これが社会的な火種となりました。「自分たちも子育てをしたい」、「子供から離れたくない」と主張した人達がいました。この主張が学問的な動きとクロスして意識改革が起ったのです。日本では 1980 年代に伊藤公雄さんが「男鎧論」を唱えたことが最初だと思います。男性に重く押し掛かっている「男は仕事」や「男は稼いでなんぼ」という考えを鎧に喩え、身に付けている鎧を一度ほどいてみませんかというものです。この発言は経済状況とともに信憑性が増してきました。

中村：経済成長に合わせてということですね。

「男らしさ」は自殺という悲劇をも招く

石原：経済は右肩上がりで成長し、バブル経済においては、そこそこ働けば良い暮らしもあり、仕事で自己実現も出来ていました。しかし、バブルが崩壊すると「男は仕事」という考えが通用しなくなりました。大学を卒業して 2,30 年、一生懸命働いていて家族と過ごす時間がない。そのような状況下で自らのアイデンティティは良い仕事をして認められることである。こう考えていた男達が簡単にリストラをされ、路頭に迷っていく。男らしさは仕事が出来ることであると洗脳されているため、仕事を否定されてしまうとガクンと来てしまうのです。ある統計によれば、日本は自殺数の多い国で、昭和 54 年から平成 9 年ま

では年間で約 2 万人の方が自殺しています。しかし平成 10 年以降は一年あたり約 1 万人も増えています。これはバブルが崩壊した影響です。さて、一番注目すべきポイントは上げ幅を担っている層です。確かに女性の自殺数も少し増えているのですが、働き盛りの男性の自殺数が圧倒的に増えたのです。今もなお経済状況は悪く、年間約 3 万人の自殺者がいるというのは大きな社会問題であり、厚生労働省も色々と対策をしていると思いますが、これだけの数の背景には仕事で行き詰まり先が見えなくなってしまう働き盛りの男性の姿があると思います。ですから、仕事一本で自分の人生を決めてしまうような考え方や生き方は大きな危険を孕んでいます。コミュニティに関わる、家族との時間を作る等もっと多様なチョイスを持つべきです。

仕事ばかりやってきたダンナさんやお父さんは家族との接点が無くなってしまう。そして仕事がダメになってしまうと袋小路でどこに行けば良いかわからず、最終的に悲劇的な手段をとってしまうのです。育児等様々な問題がありますが、男性学というのは下手をすると命を奪ってしまうような真剣な問題です。ですから、男性はもっと様々な生き方してください。仕事に情熱を注ぐのも良いのですが、それは一つのチョイスです。

石原先生の「男性学」

中村：実際受講されている方に男性はいるのでしょうか。

石原：男女比は半分半分位です。女性にも是非受講して欲しいクラスです。男性が抱えている問題を異性の方が知っていれば、パートナーが問題を抱えた時に色々と理解出来ると思います。

阿部：ディスカッション形式で行われているとお聞きしたのですが、学生からはどのような意見が多いのですか。

石原：やはり色々な人がいますが、特に男性ですと「ここで男らしさを見つけに来ました」という人もいます。

中村：名前だけを見て受講したのでしょうか。

石原：そうかもしれません。早稲田王[※]も来ました。やはりそのような人達が考えている男らしさは肉体的な強さです。しかし、このような話をしている内に色々感じてくれます。仕事が出来ることや体力があること等、古典的なものを男らしさという人が多いですが、否定はしたくありません。しかし、それだけを男の生き方だと別の誰かに押しつけることはいけません。

※早稲田王：早稲田祭にて行われる企画集団便利舎による企画。昨年で 11 回目を迎えたこの企画では、様々な試練を与え、早稲田一を決める。

男性学に興味を持ったきっかけ

阿部：なぜ男性学に興味を持ったのですか。

石原：大学院生の時、妻に支えられました。彼女が毎朝遠いところに通い、私は毎朝スー

パーで食材を選んでいました。その時の生活は伝統的な男の生き方とは 180 度違うものでした。私も早稲田大学出身でしたので友達はバリバリ働いており、その中で自分自身、全く違った生き方をしているとモヤモヤとした部分がありました。特に印象的な出来事は、テープレコーダーから流れているアナウンスです。そのアナウンスは必ず「奥さん奥さん」という言葉で始まっていました。その時、やはりスーパーに行って食材を買い、ご飯を作ることは女性の仕事であると思われると感じ、すごく居心地の悪さを感じました。それから、「男だって食材を買って家族の健康を考えて晩御飯作ったって良いじゃないか」と思い始めたのです。

アメリカに 4 年間留学をしたのですが、アメリカでは大きく違っていました。友達のパーティに行った時、「今日は僕がクッキーを焼いたんだけどいかが」と言われました。日本では男性がゲストの対応をして、自分の奥さんをキッチンに追いやっている姿をよく見かけますが、アメリカでは逆でした。そこで「アメリカではこのように男性がキッチンに入るの？」と聞いたところ、その人は「もし自分だけが対応し、奥さんをずっとキッチンに追いやっていたら、大学関係者はリベラルな人が多いので自分の人格を疑われるかもしれない」と言っていました。女性を抑圧している男性なのかと疑われてしまうかもしれないということです。アメリカはすごく多様で、そういう生き方も良いと思いました。女性も男性も性の関係なしにもっとオープンで、助けられるところは助け合っていくような生き方はすごく風通しが良く、日本でも浸透したら良いだろうと思いました。

このような経緯で専門ではありませんが関心を持ち、新聞記事等を切り抜いている間にこういうクラスを持ってみないかという話になり、やってみることにしました。早稲田の学生はすごく意識が高くて、逆に学ばせてもらっています。やって良かったと思います。

男性の家事への関わり方

中村：いつ頃から始めたのですか。

石原：4,5 年ほど前から始めました。オープン教育センターの女性学の方とチームでやっています。最初は女性ばかりでしたが、男性の視点も欲しいということで声がかかり始めたのです。やって良かったです。学生の方々はアンテナが鋭く、今の情報を敏感にキャッチすることが出来ています。講義の中で「大衆文化で観た男性」を扱っています。面白かったトピックは、男梅等、男性をターゲットにした食品男梅です。なぜこのようなものが出てきたのかを分析し、レポートを書ってくれた学生もいました。

男性の特徴の一つとして、ちょっと高くても良いからクオリティーの良いものが欲しいという考え方があります。育児にもこの特徴があります。例えばイクメンは育児を行う男性のことですが、乳母車やベビーカーを選ぶ際、ラルフローレン等ブランド物じゃなければ嫌だという男性もいるそうです。料理用の鍋一つをとっても結構高いものを買うことがあります。これらの例は男向けの食品等のようにクオリティーを追求したり、お金に糸目をつけない部分と重なっているという分析をしてくれた学生がいましたが、なるほどと思

いました。昔からある伝統的な男性性とどこかで結びついている部分があり、そこに着目して企業が利益をあげています。この傾向が古い男性性を強化してしまう面もあります。

阿部：このような状況では、男性学は普及しづらいような気がします。

石原：いずれにしても家事にはあまりにも参加して来ませんでしたので、どのような形でも関わると良いと思います。この話をすると思い出しますが、友達と話をしていると「私は家事をやっています」という人も多いです。しかし「どういう仕事しているのですか？」と突っ込むと、やはり料理や子供の世話等、やったことによる喜びが形として目に見えるものです。育児では子供を可愛がると笑顔が返ってくる、また料理を作ると奥さんが美味しいと言ってくれます。ですが家事はすごく地味な、ほとんど感謝されないものなのです。例えば「お風呂のどろどろした排水溝の汚れは誰が取っているのですか？」と聞くと「それは家の奥さんが…」ということになります。ですから、そのような地味で感謝されない家事にも関わって初めて、本当の意味で家事のイコールな負担になるのです。

男性＝濡れ落ち葉族？

石原：経済的な問題もあります。家計は奥さんに任せておけば良いやと言って、金に糸目をつけずに高いものを買くと、特に女性から不満が出る可能性があります。もっと総合的に考えていかなければなりません。危機の話をしますと、現代は高齢化社会ですので多くの退職後の男性が家庭に帰ってきます。統計によると、約 85%の男性が退職後の生活を楽しみにしているようです。しかし、パートナーである女性の約 40%が憂鬱と答えているのです。家のことを何一つ知らない人が帰ってきて、家で一体何が出来ののだろうかということでしょう。帰ってきたことによって関係が悪化していく場合もあります。家事が出来ないのに家にいて「お茶一」や「風呂一」等と言う。自分でやりなさいとなります。それまではお金持ってきていましたが、その関係も終わってしまいます。このような姿を男性学では濡れ落ち葉族と言います。いくら竹箒で掃いても濡れ落ち葉は箒に付いていきます。他にもワシも族と言います。奥さんがどこかへ行こうとすると「ワシもワシも」と言っについてこようとします。奥さんには旦那が働いていた時に築いたコミュニティーやネットワークがあり、そこに旦那が入ってくるのはハッキリ言って邪魔です。その結果、旦那の在宅で鬱になる女性が生まれることがあるのです。

また、そのようなフラストレーションは男性側も感じ、酷い場合にはギクシャクして熟年離婚に繋がります。ですから、ちゃんと自立しなければいけません。男性は自立というと仕事が出来て経済的に自立するということを考えるのですが、本当の意味での自立とは生きていけることです。お金があれば良いということではありません。例えば普通の料理位だったら作れる、あるいはお米 5kg の値段がいくらであるかわかる。このような基本的な生きる術を自分で培っておかないと、最悪な状態、例えば熟年離婚しまった時に一人で生きていくことができません。さらに、もしそれが出来れば、退職後も自立した 1 対 1 の男女として奥さんと良い関係が続けていくことが出来るかもしれません。

男性は育児休業を取得できるのか

阿部：就職活動中に伝統的な男らしさの根強さを感じました。男性しか取らないような企業もあるようですが、このような状況下で本当に普及するのか疑問です。

石原：育児休業の問題でよく感じます。厚生労働省は育児介護休業法を 2010 年に改正し、男性がどんどん育児に関わっていかなければいけないということで、ホームページでもイクメンプロジェクトを開くなど、かなり後押ししています。このように制度的には少しずつ整備されているような気もします。しかし企業を見てみると、男性の育休取得率は 1%以下ということもあり、さらに取得した人でも 2 週間しか取っていないということもあります。最初の一步としては良いと思いますが、このような事実を聞くとアリバイ証明であるような気がしてしまいます。もっと進み、最終的には男女で平等に取れるようになれば良いと思います。しかし、男は仕事という考え方は根強く、男性も気を遣ってしまって育休が取りにくいのが現状です。例えば育児休業を取ってしまうと出世競争から外れてしまうのではないかと考えてしまいます。ですから、制度はあっても企業文化的に取ることができないということです。そこを変えていかないと問題は中々進みません。

志半ばに倒れる専業主夫

中村：先生は専業主夫についてどう思われますか？

石原：専業主夫は増えています。これは経済的な理由もあります。例えば共働きをしていたのだが男性が解雇されてしまい、女性が働くというような現実的な問題です。ただ、それでも多様化してきており、生き方のチョイスとして専業主夫になる人もいます。しかし、主夫は難しいです。続けられない男性が多いです。

中村：なぜでしょうか。

石原：結局「男性は仕事」という伝統です。その人は違うと思っけていても、親戚や友達から「あの人が何やってるの」というプレッシャーがあります。そういうプレッシャーを撥ね退けることが出来る男性が強い男性だと思います。専業主夫は強い男性です。長期間専業主夫を楽しく続けることが出来る男性は、一本ガツッと芯が通っていて、強い男性の一つだと思います。実際はやめてしまう男性が多く、張り切って始めても半年位経つと専業主夫鬱になってしまう男性もいます。鬱になる前に仕事を探す男性も多いです。主夫という仕事自体すごく難しいのかもしれませんが、外との接点を見出していくことは難しく、例えば公園デビューに関しても男性と女性で距離を感じてしまうこともあります。もしかすると主婦よりもコミュニティーや地域のか係を結び辛い点があるかもしれません。私も自分自身が主夫になると考えると、やはり難しいと思います。ですから、一つの型だけではなく、色々な自分・ポジションを維持しておく方がある種のセーフティーネットになると思っています。主夫だけに白黒でバツと変えてしまうのではなく、兼業くらいから始めて自分がどのくらい順応性があり、またどのような問題があるのかを経験してみて、それから変え

ていくほうが現実的だと思います。

なぜ男性はDVに走るのか

石原：男性学ではDVも内容として扱っています。今は男性側がDVを受けるというケースも増えてきていますが、やはり男性が加害者になっていることが圧倒的に多いです。実は男性が暴力に走ることは男らしさと大きな関係があります。もちろんDVに走ってしまう男性の全員がそういうわけではありませんが、一つの傾向としてあるのです。例えばパートナーの女性が自分より収入が多いという場合です。この場合、暴力を振るうことで自らの優位性を証明しようとしているのです。男性は女性よりも優位でなければならないと信じていて、自分より稼ぎのある奥さんに対して暴力によって優位性を示そうとするのです。そして自分の自信の無さを取り戻そうとします。このような人を傷つける手段で取り戻そうとするのは絶対にあってはいけないと思います。人間の価値は収入の多寡で決まるわけではなく、男は稼がなければいけないという男性的価値観に囚われてしまっているからそのようないびつな形で出てきてしまうのだと言いたいです。もちろん様々なDVの形があるのでそれだけではありませんが、男性から女性へのDVの理由としてよくあることなので気を付けてください。私の講義を受けている人は大丈夫だと思いますが、周りにそのような人がいたら声を掛けてあげてください。

中村・阿部：ありがとうございました。